

辻信一

「ゆつくり」生きる(再)と

つじ しんいち

明治学院大学国際学部教授

文化人類学者、環境運動家、ナマケモノ倶楽部世話人、二〇〇万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表。数々の環境文化運動や、環境共生型ビジネスにとりくむ。米國コーネル大学でPh.D取得。著書に、『ゆつくり』、『ビューティフル』（平凡社）、『ゆつくり』、『いいんだよ』（筑摩書房）、『訳書』『きみは地球だ』（テウイット・スズキ著、大月書店）ほか多数。最新刊は『しないこと』（ポプラ社）。

「スローライフの思想」を提唱する辻信一さん。自身の活動を文化人類学の領域に限定せず、裾野を大きく広げながら、国内外の実践へとつなげている。

文化人類学が実社会と関係していくつぎの最前線にある存在として注目の人物だ

聞き手 中牧弘允（本誌編集委員）

——辻信一というのはペンネームだそうです。その由来はなんですか。

若い頃、日本に合わなくて流れていった先のアメリカで、働きながら大学と大学院へ行きました。コーネル大の大学院にいたとき、日本の雑誌などで生意気に執筆活動を始めたんですが、ぼくが尊敬する鶴見俊輔さんが気をきかせて、授けてくださった名前です。他にもいくつか名前がありました。て、学生たちは「あの人は何者かわからない」と面白がっているようです。名前をいろいろもつ



は一種の趣味で、その方が人生豊かになるとぼくは思っています。

——文化人類学者と環境運動家、ふたつの立場をおもちですが、文化人類学に興味をもつきっかけはなんだったのでしょうか。

大学では哲学を専攻したんですが、実は勉強するためというより、学生ビザをもつ暮らしを維持



辻ゼミの教科書でもある『ラダック—懐かしい未来』の著者で、環境活動家のヘレナ・ノーバーク＝ホッジ氏を囲む辻さん（中段左端）とゼミ生（提供・ナマケモノ倶楽部）

したいというのが本音だったんです（笑）。働きながら学び遊び、旅をするというのがやめられなくなりました。カナダのマギル大学にいるとき、客員として来ていた哲学者の鶴見俊輔さんの授業をうけました。これが大きかった。ものを考えたり書いたりするのが非常に楽しくなりました。それで大学院へ行こうと思っただんですが、実は図書館なんかじつとこもるのがきらいなんです。ああいう空気が流れない場所があんまり好きじゃなくて。もっと外に居られるものがやりたい、自分はフィールドワークの方が性に合っているという感じがありました。鶴見さんの著作にみるような、フィールドでの丁寧な聞き書きというんでしょうか、それへのあこがれもありました。

——フィールドはどういうところに？

ニューヨークや、カナダのモントリオールの移民地区です。ぼくは住んでいたモントリオールの街が大好きだったんですが、そこはフランス語系の人たちが住む東モントリオールと、英語系が強い西モントリオールとに分かれていて、その中間に移民地区がある。V・ターナーの境界性の理論などが念頭にあってこのセッティングが面白いと思えました。

移民地区はユダヤ人がつくっている場合が多く、そして彼らが出て行った後には他の移民、いわゆるニューカマーがやってきました。そこでホスト社会に同化したり、あるいは自文化の維持をしたりという営みを展開してきた。ぼくは、カナダの多文化主義は草の根から育っていったと考えていて、特に移民地区の存在が大事じゃないかと思っただんです。そんなことをなんとか博士論文にまとめました。できはともかく、そこで行っている人々と議論しながら暮らすのは実に楽しかったですね。

——環境運動にかかわられたのは？

ぼくはもともとアメリカの黒人音楽が好きでアメリカに渡ったくらいで、黒人地区ハーレムの調査をしたり、日系人の歴史を調査したりするうちにインディアンと出会うようになった。そこからだんだんエコロジカルなことに惹かれるようになっていきました。またカナダで、デヴィッド・スズキという、インディアンと非常に近いところに身を置いて環境運動している生物学者と親しくなったことも契機ですね。彼はカナダでは英雄的な存在で、特に環境問題では大きな影響力をもっています。彼に勧められてカナダ西海岸の先住民族を訪ねるようになりました。そのなかで親しくなったグループのひとつに、ニスガという先住民族があります。今号の表紙になっていると思います。民博のアメリカ展示にあるトーマスボールのうち一本をつくったノーマン・テイトはそこの人です。ぼくは彼の弟のアルビン・テイトと仲良くしていて、二人を日本に呼んだこともあります。屋久島で、先住民族と森との関係や精神性をテーマにした集いがあったり、屋久島の森で彼らの儀礼をやってもらいました。

ひとつの領域にとどまらない

環境運動家と文化人類学者といっていますが、学者と呼ばれるのは今でも面はゆい。というのは、先住民はいつも問題を抱えているじゃないですか。環境問題にしても社会問題にしても。研究するつもりで行っても、それが他人事でなくなり、すぐに一緒に運動している自分がある。むしろ運動の方に重心を置きつつ、大学で教えたり文章を書い

たりしていこう、いわゆる学者の枠におさまらないのが一人くらい居てもいいだろうと考えてきました。

それと、ぼくはビジネスも大好きなんですよ。アメリカではTシャツ屋もやっただし、カナダではソバの会社をつくりました。ご存じのように北米の人びとにとって循環器系の病気が大きな問題です。ソバはそれに非常によい効果があるし、ケベック州では良質のソバがとれる。そこに目をつけたビジネスだったんです。途中で日本に帰るのて手を引きましたが、今でもあれは面白いビジネスだったと思います。

ビジネスなどの経済活動、知的でアーティスティックな営み、社会変革のための運動。ぼくが帰国する前から、北米にこの三つの領域を自由に行き交う人たちが活躍し始めていたんです。例えば、パンクの格好をしている若者がIT企業で活躍していたかと思うとWWF（世界自然保護基金）の活動に身を投じたりする。株で稼いだお金で、チリの自然保護のNGOを立ち上げるといふように。

——境界がないわけですね。

そうですね。思えばぼくも学者か、ビジネスマンか、運動家か、というふうに選んだことは一度もなく、ぼくの人生にはいつも三つの要素が絡み交じり合っていた。しかし日本ではこれら三領域の間に高い壁があります。学者もビジネスマンも運動家も互いに拒否感もちあっている。世界が大きく変わろうとしているときに、昔ながらのテリトリーに安住していられるというのは幻想です。ビジネスも運動も学問も、自分の領域に閉じこもっているようでは将来はないと思います。

——ナマケモノ倶楽部というNGOをつくって代



社さんも役員を務めるカフェ「北のハチドリ」（東京都北区王子）。オルタナティブな生き方やビジネスのあり方を発信するスロー・カフェ・ムーブメントのひとつだ（提供・ナマケモノ倶楽部）

ようにと、全国あちこちにいわゆる「スロービジネス」ムーブメントをおこしました。運動といたって何も大げさなことではなく、ぼくらが生きている世の中をちょっとでもマシな場所にしていこうとか、ぼくらの子ども世代が生きていくためのよい仕組みをつくらう、ということですから。そういうのをあきらめないと生活ができないというのとは変な話で、市民社会として失格なわけですよ。

——こういう運動にも、ビジネスとして成り立つためのノウハウが大事ですね。一方、ビジネスに



戸塚善了寺境内の「ぼちぼち農場」にて、住職やゼミ生とともに畑仕事（提供・ナマケモノ倶楽部）

表をつとめておられますね。なぜ「ナマケモノ」だったんでしょうか。

中南米で、ナマケモノの住む森がすごい勢いで伐採されているのを目の当たりにしました。ふつう動物たちは森から逃げ出すんですが、ナマケモノはのろくて逃げられない。人間につかまって食用にされるなど残酷な扱いを受けていました。それをどうにかしたいと、その生息について調べているうちに、その魅力のとりこになってしまったんです。

一般に流布している俗説「ドヴィニズムという

ならない運動もされてますが。

「一〇〇万人のキャンドルナイト」のことですね。あれはブッシュ政権発足時の年頭教書を聞いてとんでもないと思ったからです。経済成長路線でどんどんエネルギーを消費するという話でしたからね。それに非暴力・無言の抵抗運動として、自主停電をやったんです。これが楽しかった（笑）。子どもの頃、停電ってわくわくしたじゃないですか。初めは抗議の意味だったのが、それ自体が楽しくなって、だんだんと広まった。これまでの抵抗運動にはどこか禁欲的なところがあつたけど、自分が面白くない運動は、やはり他の人にも広まらない。自主停電では仲間たちと「これが世界中に広まってみんな電気を消したら、地球の上に暗闇のウェーブがおこせるかもしれない」と面白がっていたら一〇〇万人どころじゃなく、もっとデカい話になりました。

これからは 人類学的なものの時代

ぼくは、経済成長主義は一種の狂気だと思っている。最近流行りの経済学など、実に単純で幼い発想に基づいています。損得勘定で動き、無限の欲求に突き動かされるのが人間の本性であるとか、自由な市場が最善を生むとか。そんなおそまつな「学」が独走するのを、しかし他の学問が易々と許してしまつた。でもそんな時代も終わりです。ぼくは、これからは人類学的なものが戻ってくる、と信じている。例えば、経済史家ポランニーをはじめとする経済人類学が大きな役割を果たす時代だと思っています。

——こういうと夜を照らしてきた電気を一回消して

か、いわゆる弱肉強食の考え方がありますね。生存競争ではより速くより強く進化したものが生き残る。今の経済優先の社会もそれで動いているようなところがありますが。でもナマケモノはそれとは対極で、遅い方へと進化していった結果ちゃんと栄えている。

「より速く」の生き方を 変える

一九九九年、ナマケモノ倶楽部の発足にあつてこう宣言しました。「ソウを救えとかトラを救えという運動がよくあるが、我々のはそうじゃない。我々は、ナマケモノになるんだ！」と。環境破壊のほとんどは先進国に住む我々のライフスタイルのせいですから、それを変えることが第一です。森林破壊につながる鉱山開発や農地拡大などは、我々の超ファストな、かつての千倍とか万倍の速度をもつ生活を支えるため。だからこの生き方をスローダウンすることなしに、環境保全や自然保護なんてありえない。これがスローライフなんです。

——実際の活動はどんなものですか。

ナマケモノ倶楽部では、最初からビジネスと知的探求と運動との融合をめざしています。例えば、海外での森林保護運動などを支援するためフェアトレードで、森林農法による有機コーヒーの卸販売にも取り組んでいます。当時まだめづらしかったフェアトレードのコーヒーを広めるために、カフェをつくらうというアイデアが出て、二〇〇一年に東京国分寺に「カフェスロー」をつくりました。以来、フェアトレードやカフェづくりで若者が起業し運動に取り組みながら生計をたてられる



「電気を消してスローな夜を」と呼びかける「100万人のキャンドルナイト」。社さんが地元で始めたお寺からのムーブメント「カフェ・テラ・テラ」にて（提供・ナマケモノ倶楽部）

みる、キャンドルナイトのような行動が、人びとのなかにある何かを思い出させるかもしれません。経済優先のこの社会を支えてきたのは恐怖であり、現在の便利な生活を捨てて今さら暮らしができなくなるという思い込みです。この、一歩も戻れないという恐怖の元には、遅れた、未開の、野蛮なる自己を切り捨てることによって、やっと文明人になったという「自己否定」のトラウマがあるんじゃないかな。

——アマゾンの先住民社会では毎晩がキャンドルナイトのようなものでしたよ。電気がなくなつたつて、ちゃんと暮らしているという気づきは大きいですね。昔に戻るのではなく今の生活があるわけ



ですから。最新刊『しないこと——スローライフのために』で書かれたこともそれに通じますね。

「しないこと」の発想は、近代社会・文明社会の本質は「すること」の過剰にあるんじゃないかということなんです。グローバルズムとは世界を「すること」で覆い尽くすこと。すればするほどモノが満ちて、ゴミもCO2もあふれかえってしまっ。人びとの毎日も「すること」ばかりで忙しくて窒息しそうですよ。みんな「すること」リストに追われている。そこで、その横に「しないこと」リ

ストを置いてみたらどうですか、という軽い提案だった。でもやってみると面白いことが見えてくるんです。「する」の反対って何だと思いませんか？

——「しない」でしようか。

「起きる」の反対は「起きない」だと思いますが、実は「寝ている」だと思います。つまり、「する」の反対は「居る」だと。ドゥーイングの反対はビーイング。人間はヒューマン・ビーイングだった筈なのに、すっかりヒューマン・ドゥーイングと化してしまった。何のために「する」のか、もう誰にもわからない。かつては「居る」ためだったはずなのに、今や「する」のために「する」ために「する」……。いつまでたっても、「居る」時間がない。これをほくは「するする社会」と呼ぶんです。

「する」ことをちょっと休んで、ただ居てみる。普段見ていなかったいろんなものが見えてきますよ。スローダウンは実はホンモノの豊かさへの道筋なんです。『より速く、より多く』を合言葉に効率ばかりを求める人生なんてろくなモンじゃないでしょう。自分の過去を振り返ってみると脇道にそればかりで、道に迷うことも多々あったけど、近道を来なくてよかったとつくづく思います。

——寄り道したことで、辻さんのなかに豊かな発想がつけられたわけですね。著書にちりばめられた言葉の遊び感覚もいいたいですね。

言葉遊びといえは、ぼくは、片倉もとこ先生の「ゆとりぎ」が好きです。

——「ゆとり」と「くつろぎ」をあわせ、真ん中の「りくつ」を抜くという(笑)。イスラムの考えからきたものでしょうね。

イスラムのスロー思想、スローライフを見事に

体をあらわす「whole」からきている言葉だそうなんです。ヘルスにしてもヒーリングにしても対象にするのは、全体のバランスが欠けた状態であると。この考え方は、おそらくほとんどの文化の根底にある世界観だと思います。

——バランスを保つというのは、シャーマンの役割です。さまざまな手立てを講じては、アンバランスになった人間関係を取り戻すというように。辻さんのお仕事も、バランスを崩した社会に対するシャーマンなのかもしれませんね。

どっちかというトリックスターでしようね(笑)。海外から帰ってきて大学で教えるようになった当初は不向きかなと悩みました。でも今は、若い人たちと一緒にいろいろやるのがますます面白い。学者が不用意に「学生の劣化」などと言うのを聞くのが嫌いです。若者の感性は現代を越えて、来るべき社会を先取りし始めている。もちろんそれは、世界がそこまで追い詰められていることへの反動でもあるわけですが。

何かをやることで見えてくる

ぼくは楽観的な人間ではないです。環境運動をやっていたら楽観的にはなれませんよ。けれど、悲観してもしようがないです。からね。あとはどんどん若い人にまかせればいいんですよ。でも若者たちにしてみれば、新しい時代をつくるにも、その材料の



辻さんのゼミでは、年間を通して農作業実習がおこなわれる(提供・ナマケモノ倶楽部)

言いあらわしていると思います。こういう遊び心いいですね、「文明の衝突」なんていう乱暴な発想がまかり通るこんなご時世に読むとほっとします。こういうことを考える人類学者がちゃんと居るってことを広めていくことが大事ですね。

——もうひとつの最新刊『スローメディスン』で対談された上野圭一さんは、民博で共同研究をしていたこともあるんですね。

彼は翻訳家で代替医療のエキスパートですが、その仕事はすぐれて人類学的だと思っています。この本でもふれていますが、健康をあらわす「health」、癒しにあたる「healing」は、もとは全



最近のフィールドであるブータンにて。国王の提唱で、憲法に「GNP(国民総生産)」ならぬ「GNH(国民総幸福)」という考え方が明記された(提供・ナマケモノ倶楽部)

もちあわせが少ないんです。そこにぼくたち上の世代の役割がある。過去をちょっと振り返ればいろんなヒントがあるし、ましてや、人類学は、新しい社会づくりに使える材料の宝庫です。

カフェなんか、とりあえず若者を手伝って一緒にやってみることで。動き出せば彼らはいろんなことに興味をもちますよ。フェアトレードは「顔の見える関係」だとすれば、「じゃあ会いに行ってみようか」となる。ミニ人類学が始まります。「フェア」という言葉も、考える入口としていいんです。昔ほくらが若い頃に使った「正義」だと、すぐ話がこじれるんだけど、「フェア」なら、文化相対主義という言葉を知らなくたって、どういう関係がフェアなんだろう、ここの人たちにとって何がフェアなのか、と若者は考えますから。

——若者をあじぎまに言う論調があります。捨てるもんじゃありませんね。

うちのゼミは、しょっちゅう田んぼや畑に出る農的ゼミです。地下足袋が必需品という、なかなか大変なゼミなんです。そこで彼らのなかに何が起るかは、ぼくにもよくわかりませんが、まあ、何か面白いことは起る。それがヒントになって、これからの生きる力になるんじゃないかなあ。その点、ぼくはひどく楽観的ですね。

——以前とちがう自分を学生は発見するわけですか。見えないものが見えてくる、新しい輝きがあらわれるというところですね。本日は広がりのあるお話をお聞かせいただき、本当にありがとうございました。